

つるがかずと 会員紹介：敦賀和外さん

私の略歴



1970年（昭和45年）、自動車メーカーに勤めていた父が赴任していたタイのバンコク生まれ。私の名前「和外」は、「大和（日本）」の「外」で生まれたことが由来とのこと。タイにはその後、父の二度目の赴任の際にも同行し、自らの仕事でも短期でタイに滞在し、通算8年ほど生活したので、タイは自分の故郷だと思っています。よくタイ人にも間違われます。

高校卒業後に日本に帰国し、国際基督教大学(ICU)に入学。心理学を専攻していましたが、国際関係関連の講義もよく履修していました。タイで途上国の現実を垣間見たことも

あって、漠然と国連や JICA で国際協力の仕事に関わりたと思っていましたが、まずは社会を幅広く眺めてみたいとの考えから、1993年に卒業した後は学生時代から縁のあった読売新聞社に就職。読売新聞社には6年間勤め、退職後 ICU 大学院行政学研究科に進学し、2002年に卒業。2002—2006年まで国連開発計画アフガニスタン事務所にプログラム・オフィサーとして勤務。2007年にはコンサルタントとして、カンボジアの融資案件に従事。2007—2008年には広島大学平和構築人材育成センターにプログラム・マネジャーとして勤務。その後 2008—2010年まで日本政府国連代表部に一等書記官として国連の安全保障理事会と平和構築委員会を担当しました。2010年より大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授。

国際協力の世界へ

6年間読売新聞社で働き、それなりに充実した日々を過ごしていましたが、学生時代からの夢を捨てきれず、一念発起して退社し母校 ICU の大学院で国際関係論を学びました。当時の ICU には、指導を仰いだ功刀達朗先生をはじめ国際機関出身の先生が多く、大学院後に国連で働きたいと思っていた私には大変刺激のある研究環境でした。その時に高橋一生先生にもお会いし、修論の副査としてご指導いただきました。大学院修了間際に JPO 試験に合格し、修了後 2002年に UNDP のアフガニスタン事務所に赴任することになりました。そうして国際協力の世界に足を踏み入れることになりました。

SRID 入会のきっかけ

2010年頃、ネットで何かを検索していたところ、偶然高橋先生のお名前を SRID のページで拝見し、ご無沙汰していたので連絡を差し上げた際に入会を勧められたのがきっかけです。大阪にいることもあり、未だ会合にお伺いすることができておりませんが、経験豊かな先輩たちのメーリングリストでの活発な議論を拝見し、刺激を受けています。

従事した仕事の内容

(読売新聞社)

読売新聞社では記者職ではなく事業局で文化事業の仕事に携わり、ルーブル美術館、ワシントン・ナショナル・ギャラリーの美術展、ジャズ・サクソ奏者のソニー・ロリンズの日本公演などを担当しました。思い出深いのは入社直後から関わったバーンズ・コレクション展（1994年）です。当時門外不出といわれていた米国フィラデルフィアにあるバーンズ財団所蔵のセザンヌ、マティス、ピカソらの絵画が初めて世界巡回し、日本でも100万人を超える入場者がありました。毎日上野公園に長蛇の列ができ、運営側としては冷や汗の連続でした。そのほかにも、タジキスタンの博物館から借りた壁画を返却するためにロシアまで渡航したものの、トラブルの連続で困り果てたこともありました。

(アフガニスタン)

国連開発計画アフガニスタン事務所が初めての現場となりました。9・11後の2002年11月に赴任し、2006年初頭に離任するまで3年以上滞在しました。カブールでは地雷除去や早期雇用創出のプログラムを担当し、最終年はアフガニスタンにおける



UNDPの戦略作りにも関わることになりました。当時のUNDPアフガニスタンは、選挙支援やDDRにも関わっていたこともあり、年間予算が300億円を超えて一時期、世界のUNDPカントリーオフィスのなかで予算額がトップ・クラスになったと記憶しています（そしてその分苦労も絶えませんでした）。現場といっても国際機関のプログラム・オフィサーの仕事はデスクワークが中心で、移動の自由も限られていましたからオフィスと自宅を国連車で移動する毎日でした。それでも時にモニタリングでプロジェクト視察する機会もあり、ヒンドークシュ山脈の美しさやアフガン人の温かさに触れ、アフガニスタンがとても気に入っていました。現在は私がいたころよりも現地情勢は厳しくなっていると聞き、とても残念に思っています（と同時に無力感も感じました）。

(カンボジア)

アフガニスタンから帰国後は、少しの休養を経て2007年初頭から国際協力銀行（当時JBIC。現JICA）のカンボジアの案件にコンサルタントとして関わる機会を得ました。友人からの紹介でグローバル・グループ21ジャパンにお世話になりました。アフガニスタンで平和の定着に関心を持つようになったのですが、ポスト・コンフリクトの国を渡り歩き、似たような経験を積むよりは、紛争終結から15年以上経っていたカンボジアの現状を見ることで、紛争を経た国において平和時にどのようなことが課題となっているかを学べると思ったので、採用されたときは嬉しかったです。マルチ

の国連からバイの JBIC へ、そしてコンサルタントという新しい立場で働くことで経験の幅を広げてくれるとも考えました（今でもそれは正解であったと思います）。



だき今でも感謝しています。

カンボジアでは、世銀や EC、DFID とともに JBIC が直接財政支援（カンボジア貧困削減成長オペレーション (PRGO)）に参画することになり、カンボジア政府及び他機関とともに達成マイルストーンの作成及びカンボジア政府との LA 締結準備作業に関わりました。援助調整はアフガニスタンでの経験が活きましたが、JBIC 側の作法や手続きには慣れない点もあり最初は四苦八苦しました。バンコクをベースに月 2~3 回の頻度でプノンペンを訪れ、10 か月程度の期間にバンコクープノンペンの往復は 20 回を超えました。コンサルタントという立場でしたがバンコク駐在員事務所に席をいただき仕事をしていました。最初は職員の方たちとの距離感をどう保てばよいのかわかりませんでした。温かく迎え入れていた

（HPC と日本政府国連代表部）

JBIC との契約が満了し日本に帰国した直後から、今度は広島平和構築人材育成センター (HPC) の仕事に半年ほど関わることになりました。HPC では、これから平和構築分野で国際的キャリアを目指す研修生に対し、国連等への就職に関し助言をする役割を与えられ、これまでの経験を通じて得た知識やネットワークを活用して次世代の国際協力人材の育成に関わらせていただきました。

HPC での仕事を終え再び職探しをしていたところ、外務省のホームページでニューヨークの国連代表部勤務の任期付職員ポストの公募を見つけ応募しました。アフガニスタンで勤務していた頃、現地で苦勞をしていたこともありニューヨークの国連本部等で行われている政策議論について懐疑的な見方をしていました。しかしながら、自らの目で確かめずには建設的な批判もできないであろうと思い、ニューヨークでは何がどのように決定されているのか体感してみようというのが応募のきっかけでした。また、今度は日本政府側（外務省）のポストということで、これまでとは違った視点で国連に関われると思いました。選考の結果採用していただき、2008 年 8 月にニューヨークに赴任しました（採用当初は二等書記官、その後一等書記官）。



国連代表部では政務部に所属となり安全保障理事会及び平和構築委員会の仕事に携わりました。奇遇なことに、カブールでお世話になった奥田紀宏元アフガニスタン大使が同時期に国連代表部次席大使として着任され、上司としてお仕えすることになりました（その後奥田大使はエジプト大使として「アラブの春」に遭遇され、2013年現在はカナダ大使としてご活躍されています）。日本は2009年から安保理非常任理事国となり、私は最初に中東和平、その後コンゴ民主共和国における平和維持活動などの政策議論に関わりました。赴任直後は電報の書き方さえ分からず戸惑う日々が続きましたが、そんな悠長なことも言っていないほど忙しい職場でした。日本が安保理に入る直前、2008年の暮れにガザ紛争が勃発し、中東和平を担当していた私は正月返上で対応に追われました。近年の安保理はほぼ毎日様々な案件の協議があり、安保理メンバーとなった加盟国の国連大使は多忙を極めます。大使の補佐として書記官も情報収集や各国との交渉に駆け回ります。私の任期中は高須幸雄大使にお仕えしました。外務省のなかでも有数の国連外交スペシャリストであった高須大使の下で日々走りながら国連外交の仕事を学んでいきました（その後高須大使は国連事務次長（管理局長）になられています）。

ニューヨークでは2年間仕事しました。ニューヨーク（国連本部）に対する見方がその後変わったか。そう問われれば答えはYesでもありNoでもあります。開発や平和構築の現場では分からなかった大きな政策の動向や政治力学について知る機会を得たこと、そして何よりも安保理の内部で仕事できたことは大きな収穫でした。他方、国連本部の現状を見て、その欠点についてもこれまで以上に理解できるようになりました。その意味では、ニューヨークでの経験を得たことで建設的な批判力を養うことができたと思っています。

（大阪大学）

ニューヨーク後の身の振り方を考えていた頃、大阪大学の星野俊也先生に同大で空席公募がある旨ご紹介いただいたことをきっかけに、2010年から大阪大学グローバルコラボレーションセンターでの職を得ました。同センターでは国連に関する教育プログラムの構築に関わり、学生の海外フィールドスタディ及びインターンシップ派遣も担当しています。2013年には6年ぶりにカンボジアを学生とともに訪れ、NGOの活動評価をしてきました。研究面では、これまで実務で関わった安保理と平和構築について研究を進めています。最近では評価研究にも関心を持っています。最近では「T型人材」という言い方があるようですが、自分にとっての専門性（縦軸）は国際関係論、平和構築論とし、汎用性（横軸）として評価手法を習得したいと考えています。

仕事上の苦勞と喜び

あまりストレスを溜めないタイプなので、仕事上での苦勞もすぐに忘れてしまうのですが、専門性の構築とキャリア・シフトのバランスには心を砕いています。幸いなことに、これまで新しい環境で仕事をさせてもらう機会を幾度もいただきました。そのたびにその職場のルールを学ぶことになり、一つの組織に長年勤めることとは違った苦勞があったのは確かです。加えて、自分の専門性をどこに定めるのか、これもこれ

まで大きな悩みでした。もともと好奇心旺盛な性分で、様々なことに関心を持つのですが、この世界に足を踏み入れた以上、専門的な知識と能力を持ち合わせていなければと自問自答を繰り返してきました。一つのことを極めようと思えば当然時間はかかり、転職をすると極めることが難しいという面もあります（あともう少しこのポストに残れば「…」ができるのに、と思うこともしばしば）。しかし自ら「終身雇用」の世界を飛び出して国際協力のキャリアを選択したので、当たり前ではありますが、専門性は所属先や立場を問わず自分で深めていくことを決意し、「極めるために転職すること」にしました。そのためには人一倍努力しなくてはならないと実感しています。

他方、この分野で仕事をするようになり、数多くの国を訪れ、各国の人々と一緒に仕事ができるようになったのは大きな喜びです。この仕事、やはり旅好き、人好きじゃないとつとまらないですね。

私の生き方

私はこれまで新聞社社員、国際公務員、NGO 職員、コンサルタント、外交官そして大学教員といったキャリアを渡り歩いています。それは傍からみれば「ふらふらして軸足が定まっていない」と云われるかもしれません。しかしながら、これまでのキャリア・シフトはその時の巡り合わせという要素も多分にあったものの、「開発と平和」という自分のテーマを様々な立場や視点から考える機会となっています。これから国際協力分野（だけでなくどの分野でも）では人材の多様化が必要ではないかと感じています。そのためには、「リボルビング・ドア（回転扉）」的に人材が各セクターを流動することが不可欠ではないでしょうか。常に職探しをしなくてはならないという側面もありますが、私はこれからもそのようなキャリア・パスを歩み続けていきたいと考えています（という自己正当化です）。まだ娘 2 人は幼いですが、彼女たちにも世界を様々な角度から眺めてもらいたいと思っています。